

講演会及び研究集会の記録

弘前大学高大連携シンポジウム 「推薦入学者に対する学習支援」

高校と大学の教育内容をお互いに知り、意見交換をする目的で、平成14年度から毎年テーマを決めて、夏休みに高校教員と大学教員によるパネルディスカッション形式のシンポジウムを実施している。

今年度で第7回目となる高大連携シンポジウムは、8月7日（木）総合教育棟404講義室で開催された。木村宣美21世紀教育センター長から開会の挨拶を受けた後、藤崎浩幸FD広報専門委員会委員の司会の下で、高校教員2名および大学教員2名による話題提供と熱の入った意見交換がなされた。参加者は55名であった。

1) 話題提供者の発表内容

1. 船越素子先生（弘前中央高等学校教諭）

国公立大学への合格者数の2割程度が推薦合格者である。高校側から見た場合の推薦入試制度は、大学入学後に取り組みたい専門分野が明確な生徒、難関大学へのチャレンジを試みる生徒、高校での定期テストと比較し模擬テストで力を出せない生徒にとってはよいチャンスである。一方で推薦入試の枠が増えると、担任の負担が増えるのも事実である。推薦合格者が他の受験生のやる気を削がないよう配慮が必要である。



推薦合格後の学習支援としては、センター受験までは一般受験生と同じように指導している（センター試験も受験させている）。しかし、一般入試の二次試験へ対応が正念場の時期に、推薦合格者への学習支援を高校側で行うことは実際には困難である。

大学への要望として、推薦合格者へのセンター試験を課してはどうか、各学部でそれぞれ課題を提出させてはどうだろうか。また、推薦合格者への学習支援が学部・学科で異なるようだが、大学側はどのような共通認識であるのか知りたいところである。

2. 三浦健先生（弘前工業高等学校教諭）

就職6割、進学4割であり、大学進学者が増加傾向にある。推薦合格者の割合が多いのが特徴である。国公立大学への推薦合格者は例年7名程度である。普通高校とは授業カリキュラムが大きく異なるので、大学入学後に授業についていけるよう基礎学力をつけることを目標に、「進学講習会」を実施している（推薦希望者には数Ⅲの履修、講習会受講は必須条件としている）。2年生の夏期休業から実施し、夏期休業中に5日程度、平日2～3日程度、英語・数学について実施している。3年生では、部活動にも力を入れている関係上、高校総体終了時から進学先別に、夏期休業中に5日程度、平日2～3日程度実施している。

国公立大学の推薦希望者は合否にかかわらず、センター試験を受験している。

進学希望の生徒は、資格取得やものづくりコンテストにも積極的である。

高校としては、大学入学後、きちんと大学の授業についていけているのかどうか気になるところである。

3. 伊藤成治先生（弘前大学教育学部教授）

推薦試験受験者の実状、入学者の実状、入学前学習支援については、各専攻・選修によってまったく認識は異なっている。総じて言えば、普通科目に関連する選修では、推薦入学者に対して厳しい見解を示している。それ以外の専攻・選修では一般入学者と比較してそれほどの差異は見られないという認識のようである。

推薦入学者に対して講座・専攻で行っている入学前の学習支援に関しては、ほとんどの場合は特に行われていない。ただし、中学理科選修では次のような取り組みを行っている。大学入学時点での学力を少しでも上げるという目的で、未履修の理科科目をⅡまでまとめるレポート、および数学Ⅲの学習を課題としている。当初は指示のみだったが、あまり効果がみられなかったため、2年前から学習内容をノートに記載して提出することを義務づけている。

入学後の学習支援として、数学の場合、21世紀教育の中で「数学の基礎」を開講している。しかし、1年間ではなく半期開講であるため、ガイダンスや試験等を除くと実際には12回程度の講義回数しかない。この講義回数で、たとえば数学Ⅲのすべてを教えることは無理であり、さらりと触れる程度のことしかできない。学生の自学自習に期待するしかないというのが実状である。

4. 成田明子先生（弘前大学大学院理工学研究科准教授）

理工学部全体というより、電子情報工学科として述べる。

推薦入学の定員が学科に占める割合は増加傾向にあり、入学者に占める割合は2割弱である。専門高校からの募集がベースになっているという点が特徴的であり、現在でも推薦入学者の半数以上が専門校、特に工業高校出身者である。

学習支援（数学Ⅲと物理の補完教育）については、当初の教員のボランティアによる補習授業から組織としての対応へ移行した。入学後の補習授業は推薦入試の2期生から実施している。2002年度入学者からは、大学の正規の科目となっている。

数年前からは、大学入学前の学習指導も開始している。センター試験の問題を解いて提出してもらう、間違えた問題を勉強し直してもらう、数学・物理の未履修科目の学習計画を提出してもらう、ということを実施している。

推薦入学者の学力の問題は教員の間でしばしば取り上げられる。一般入試の学生と同程度の割合で順調に卒業しているのになぜだろうか。理由はいくつか考えられる。

まず、補完教育が用意されていない科目もある。補完教育の必要性が認識されたとしても、入学後では学生の負担が大きすぎる。そして、普通高校出身者を想定して作られた大学のカリキュラムでは、既知事項を再度学ぶことになり、効率が悪い。さらに、資格試験志向が高いが、試験対策方式の学習方法や発想から抜けられないと、論理的思考力や専門



分野での理解力が伸びないということがあるだろう。

では、推薦入学者への学習支援はどうあるべきだろうか。

数学については、履修状況に関する大学教員の認識を改めること、学生の負担を考え入学前の指導を高校との話し合いを含めて検討すること、学生には自ら判断して行動を起こす学習姿勢がほしい。

専門高校出身者への学習支援については、効率の悪いカリキュラムの中で能力を伸ばすことと、資格試験を離れた発想を養うことがポイントになろう。

2) 意見交換

推薦入学者への学習支援、そして推薦入試という制度上の問題点について非常に熱心な意見交換がかわされた。

大学側からは、推薦入試という制度自体についての問題点が特に指摘された。

高校側からは、「高校はここまでならできる」「大学はここまではできる」という話し合いをこれまで行ってきただろうか、両者が何を要求しているのかということこれからきちんと検討し合っていくべきという指摘がなされた。



現在の高校の教育課程について、学ぶ内容が以前に比べて減ってきているという事実を大学にも理解してほしい。せっかく早めに合格を決めた推薦合格者に対して、センター試験やレポートを課すなど、入学前教育に踏み込んでほしい。

須藤理事から、「入学前支援は大事であろうという認識は十分ある。現在、大学として検討中なので、ただちに具体策を明言することは難しいが、半年ほど経たら明確な形で呈示できると考えている。今後とも意見交換して、高大連携というより高大接続という形で取り組んでいきたい。」と説明がなされた。

大学側の困惑した現状、高校側からの厳しい意見や励まし、学生側からの経験談や要望、さまざまな立場から率直な声を聞くことができた。

(備考：『21世紀教育センターニュース』より転載)